

はじめに

池内靖子

ジェンダー研究会は、国際言語文化研究所プロジェクトA1として、ここ数年は、「正義」という普遍的理念をジェンダーの視点から再構成することをめざしながら、歴史・文学・労働・セクシュアリティ・表象の領域において、さまざまなシンポジウムやセミナー、研究会を行ってきた。その研究成果の一つとして、本研究会のシンポジウムや研究会において研究発表を行ってきた研究者による単著出版があり、2008年度は2つの合評会を実施した。

一つは、2008年第2回ジェンダー研究会（9月28日）で、山下英愛著『ナショナリズムの狭間から——「慰安婦」問題へのもう一つの視座』（明石書店、2008年）の合評会が行われ、コメンテーターに、金友子氏（当時、コリア研究センター）、鄭 柚鎮氏（沖縄大学地域研究所）、応答者に著者の山下英愛氏を迎えた。

もう一つは、2008年第3回ジェンダー研究会（10月20日）で、池内靖子著『女優の誕生と終焉—パフォーマンスとジェンダー』（平凡社、2008年）の合評会が行われ、コメンテーターに、岡真理氏（京都大学）、森山直人氏（京都造形芸術大学）、李静和氏（成蹊大学）を迎えた。

以下に、2つの合評会の内容を記録にとどめておきたい。ただし、第3回ジェンダー研究会（10月20日）当日は、録音ミスで、コメンテーターの岡真理氏と森山直人氏の報告が録音できていなかったため、お二人には再度労力を煩わせることとなったが、報告概要の執筆をお願いした。当日の報告の忠実な記録ではなく、新たな書評原稿として執筆していただいたことをお断りしておきたい。李静和氏の報告は、録音されたものがあり、これを活用することができた。

上記2つの合評会では、それぞれのコメンテーターによるみごとな批評の思考と言葉が紡ぎだされ、得難い対話と応答しあう場を得ることができた。2つの著作に対する真摯な応答は、今後の研究の方法や枠組みを鍛えなおすうえで、きわめて示唆に富むものとなったことを、著者の一人として感謝したい。